

ポケットモンスター、 蒼灰の物語

黒霧春也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

広大な自然を人々とポケモンが力を合わせて切り開いて、独自の文化が広がる地方である〈アマンテ地方〉

そこに、現代からの転生者である〈グレイ〉とゲームの時の相棒であるガブリアス〈ネーム、スカイ〉が駆けるストーリー。

目次

転生と確認	1
新人トレーナーと遭遇	6
転生1日目の夜	13
アルセタウン	20
ジムリーダー・プリマ	28
第6話	34
第7話	40
バトルクラブ	46
ハイパーボールクラスのとトレーナー、 ング	53
ポケモンセンター再び	61
アルセジム	66

アルセジムその2	72
1 番道路	78

転生と確認

〈4月10日〉ストーリー開始時

俺は、大学の講義が終わってすぐに実家に帰って3DSを起動して、ウルトラサンのソフトが入っている事を確認する。

「やっぱり、相棒はカッコいいな」

初めて買ったポケモンのソフトであるダイヤモンドから使い続けているガブリアスを見ながら呟く。

「性格はたまたま理想だったのと王冠を使って強化したから普通に使えるな」

そう思いながら3DSの電源を落として、スイッチを起動してソードのソフトを入れる。

「第8世代では、リストラされたけど復帰すると聞いた時はめっちゃくちや嬉しかった」

そう考えて、ポケモンをやっているとかなり時間が過ぎたので、夜ご飯と風呂を済ませて早めに寝る事にした。

ただ、この時3DSとスイッチが光っている事に気づかなかったのである。

そして、寝ていると寒く感じたので目を開くと森の中にいたので

「なんで森の中になんだ？ それに、少し体が小さいように感じるな」

俺は立ち上がってみると

「これって、BWの男主人公の服と左腕にはキーストーンが付いている腕輪だよな」

これは夢かと思って頬を抓って見るが痛かったので

「夢じゃないのか？ そうだとするとこの状態はマズく無いか？」

正直、サバイバルなんてした事が無いので焦った時に、腰の所から何かがカタカタする音がしたので見てみる。

「これってゴージャスボールか？」

本物なのかと思って投げると

「ブウワウウ!!」

と俺のゲームでの相棒であるガブリアスが出て来た。

「嘘だろ。いやいや流石にあり得ないだろ！」

俺は混乱して頭を抱えるがガブリアスがこちらに振り向いて抱きついて来る。

「お前はスカイで合っているのか？」

ふとその言葉が出たので聞いてみると

「グワウ」

と言って頷く。

「まさかこうなるとは……。でも相棒に会えたのは嬉しいな！」

俺はガラにも無くテンションが上がる。

それから少し落ち着いた後に、今持っているアイテムなどの確認を始める。

「手持ちは少し大きめのスマホとトレーナーズカードで、お金は手持ちが20万円で通帳の中には500万円か……。これなら1年は持つ」

俺はポケットに入っている物を確認した後、リュックの中身を見る。

「回復の薬が30個、なんでもなおしも30個、満タンの薬が20個、元気のかけらが30個、キャンプセット一式、水筒、タオルなどや、食料が約1週間分だな」

なんとか生きて行けそうだな。〈後、年齢は13歳に戻っている〉

〔グウウ〕

「どうしたスカイ？」

俺はアイテムをリュックの中に戻した後、スカイが警戒し始めたのでビツクリしていらと

『ズシンズシン』

「何か来る！」

俺はスカイが覚えている技へドラゴンクロー、りゆうせいぐん、じしん、アイアンヘッドを思い出している

「あれはペンドラーか？　だがこっちに突進して来ているような……」

あれはマズいと思っっていると

「グウウウ！」

突進して来たペンドラーにスカイは手から青白い爪を出現させて近づき攻撃する。

「ヘドラゴンクロー」か。当たり前だが、これはゲームのターン制じゃ無いな」

そして、ペンドラーにスカイのヘドラゴンクロー」が直撃してぶっ飛んで行ったので

「これ、もしかして……。スカイはアニメで言う四天王のエース並みに強くないか？」

こちらに抱きついて来るので頭を撫でながらそう考える。

少しして、俺はスマホ？を起動してみると

「ポケモン図鑑、タウンマップ、通話機能、ダウジングアプリ、ネットやテレビにも繋が
るのか……。かなりの高性能だな」

俺はタウンマップを開いて、現在位置を調べるが

「アマンテ地方のアルセの森？　こんな地方ゲームやアニメでも聞いた事が無いぞ！」

流星に、これだけだとわからないのでネットに繋ぐ。

「えっと、チャンピオン〈レクト〉防衛戦成功？」

そこには、真面目そうな青年がバシヤーマと一緒に写っている写真がメインの記事
だったので

「……誰だよ！ それよりも、他に有益な情報は無いのか？」

俺はスマホをスクロールするが特に有益な情報はなかった。

「マジでどうすれば良いんだ？」

「グオウ！」

スカイが慰めてくれたので気分はまだマシにはなったが、辛いのはあまり変わらな
い。

「まあ、動いてみるか」

俺はそう思って立ち上がって、適当な方向に歩き始める。

それが、吉と出るか凶と出るかは本人次第である。

新人トレーナーと遭遇

それから数時間後……。

「歩いてても歩いてても木ばっかだな……」

元は地方都市に住んでいたので森の中にはあんまり入った事が無い。

〔グウウウ〕

スカイが自分の背中に乗るか？ と聞いて来るが

「いや、ポケモンが襲って来たら反応しづらいからこのままで大丈夫だ」

と言って断った。

「ただ、これだけ歩いてても整備された道が出てこないのは何故だ？」

しんどくなつたので少し座って休む。

〔ガアア〕

「何かあつたか？」

スカイが向いている方を見てみると

「あれはオレンの実だよな？」

スマホを取り出して確認すると合っていたので

「そろそろ昼ご飯にするか。スカイ、オレンの実がなっている木の麓に行くぞ」
〔ガウ!〕

近くにはオレンの実やモモンの実など木の実が沢山なっていて、ストライクやバタフリーなどの虫タイプポケモンも食べている。

「これだけあつたら、食料は何とかかなりそうだな」

俺は木の実を2つ手にとって1つをスカイに渡す。

〔ガウ♪〕

取って来たのはオレンの実で美味しい。

「しかし、いい加減街に行きたいな」

そう思っていると、『バキバキ』木が勢いよく折れる音がして振り向くと

「たっ、助けて!!」

新人トレーナーぼい女の子がキテルグマに追っかけられている光景を

「スカイ、凄く嫌な予感がするのは気のせいかな?」

〔ウガウ……〕

俺達は手に持っていたオレンの実を食べた後

「スカイ、キテルグマに向かってへドラゴンクロー」

〔ウガウウ!〕

スカイは青白い爪を出現させた後、こちらに走って来る女の子の頭上を飛び越してキテルグマにぶつける。

〔クーグ!!〕

向こうは反応出来ず、ヘドラゴンクローをまともに食らって吹っ飛び木に衝突して目を回している。

「ふう、危なかった。しかし、この森は虫タイプメインかと思ったら、ノーマル・かくとうのキテルグマが襲って来るとはな。スカイありがとうな」

〔ガウウ♪〕

戦闘? から戻って来たスカイを撫でていると

「ハアハア、何とか助かった……」

息切れしてへたり込んでいる少女に

『ゴン』

思いつきり拳骨を落とす。

「痛ったい!」

向こうは涙目で怒っているが、こちらが睨み返すと目を逸らされた。

「あのな、相棒のガブリアスがいなかったら俺は恐らく死んでいたぞ!」

流石にブチギレたら

「それはその……」

と泣きかけているが俺は容赦はしない。

「ハッキリ言うが、何でこの状況になつたんだ？ そつちからしたら助かったかもしれないが、巻き込まれた俺は危なかったからな」

元いた世界で説明すると、山でクマに追っかけられている人に巻き込まれたみたいだな。

確かに向こうからは仕方ない所はあるのはわかるが、こちらが怒るのも察してくれ。そう考えていると

「私は新人トレーナーで最初のジムでボコボコにされて、この森でポケモンを鍛えようと来たんだ。そこで、たまたま攻撃がさっきのポケモンに当たって、それで謝ったら襲つて来たから逃げた」

「まあ、そこは100歩譲って仕方ないな。ただ、こちらの気持ちを考えてくれるか？」
最初よりは口調を優しくして叱る。

「はい、すみませんでした」

少女は立ち上がって頭を下げて来たのでこの話は終了。

俺は道に迷っていたのを思い出して少女にその事を聞く。

「すまないが、街に行く為にはどっちに行けば良いんだ？」

そう聞いてみたが

「あつ、モモンの実やオレンの実がある！ お腹空いていてたからいただきます！」

「オイ！ 人の話を聞け！」

マイペースに木の実を食べているので、思わず突っ込む。

「えつと、なに？」

「街はどつちなのかと聞いたのだが……」

「私はさっきのポケモンから逃げて来たから道はわからない。あと、私の名前はアイレだ、よろしく」

「俺の名前はグレイ、その辺にいるトレーナーだ」

本当は転生者ですとは言えないから、こう返す。

「グレイはトレーナーランクなに？ ちなみに私はモンスターボールクラスだ」

「ランク、何だそれ？」

よく分からないなど思っていると、アイレが驚いた顔をする。

「もしかして、他の地方から来たトレーナーなのか。それなら、町のバトルクラブに行つて登録する方がいいぞ」

「その辺は知らんから教えてくれるか？」

そう言ってみると

「この地方では基本の事だぞ。トレーナーランクは、ポケモントレーナーの強さによって、モンスターボールクラス、スーパーボールクラス、ハイパーボールクラス、1番上のマスターボールクラスに分かれているんだ」

ふむふむ、ソード・シールドのバトルタワーみたいな感じだな。

「あと、この地方で大会に出たりバトルクラブで戦う時はランクで決まるから、殆どのトレーナーが登録しているぞ」

「説明ありがとう。とりあえず、町に着いたら登録してみるな」

俺はそう言って、スカイと一緒にいる程度木の実を回収して、町に向かう為に歩き始める。

「ちよつと待ってくれ、私も着いて行っているか?」

「別にいいが、お前ポケモンは?」

「それなら、モンスターボールの中だ」

そう言って、アイレは腰に付けているモンスターボールを投げた。

「クウ〜」

出て来たのは、オンバットだ。

「私がポケモンスクールを卒業した時に貰ったオンバットだ」

「そうか、初心者トレーナーにはドラゴンタイプは厳しいと思ったのは俺だけか?」

ドラゴンタイプは気性が荒いと聞くが

「そこまで、厳しくはないぞ。ただ、あまり経験を積んでないから正直弱い……。つて痛い痛い」

弱いと言った時に、オンバットに嘸み付かれているアイレを見て

「なあ、置いて行っても良くないか……」

〔ガウウ……〕

転生1日目の夜

あれから街へ向かう為、新人トレーナーのアイレと一緒に歩いているが

「あれから何回かポケモンと戦闘になって、気がついたら完璧に日が落ちた。仕方ないから、今日はこの辺でキャンプをした方が良さそうだな」

スマホのバッテリーは無限みたいだから気にしなくても良いみたいだが、暗いと何が起こるか分からない。

「ハア、やつと休める。オンバットもお疲れ様」

「クウ〜」

向こうも休んでいるので、俺はシートをひいたり、簡単な調理器具を取り出してカツプラーメンのお湯を作ったりとモモンの実を包丁で切つて、ポケモンフーズの中に入れてスカイに渡す。

「あの、少しいいか?」

アイレが遠慮がちに聞いて来たので

「何かあったのか?」

調理の手を止めて聞いてみる。

「実は、私は食料あんまり用意していないんだ。だから、少し分けてくれると助かる」
「……」

まさか食料を用意していないバカがいるとは思っても無かった。

「お前、数日分の食料は用意するだろ、なんで用意しなかったんだ？」

「それは、今日は町の近くでポケモンと戦おうと思ったのに、アクシデントがあつて森の深い所まで来たから、あんまりアイテムを持って来ていない」

そう言つて俯いてしまった。

「ハア、仕方ないか……。わかつた、食料は分けてもいいぞ」

俺はカップラーメンと木の実を取り出して、アイレに渡す。

「ありがとう。でも、グレイもあんまり食料は無さそうだけど大丈夫なのか？」

「1週間分の食料と、さっき回収した木の実があるから何とかなるだろ」

町に着いたら食料とかを買わないかと思つていと

「助かる。それよりもアルセタウンに着いたら何をするんだ？」

「まずは、トレーナーランクの登録だな。その次に、食料などを買に行きたいと思つている」

「それなら、私が案内するよ。でも、ジムには挑戦しないのか？」

不思議そうにしているので

「俺はジムにはあまり興味が無い。それよりも他の事をやりたいな」

「エリートトレーナーの資格を取ったり、大会に出て賞金稼ぎになりたいのか？」
「そうだな。それはともかくお湯が沸いたぞ」

俺は2つあるカップラーメンにお湯を注ぐ。

ちなみに、スカイとオンバットは先にポケモンフーズ+木の実を食べている。

数分後、カップラーメンが出来たのでフォークで食べると

「今日はあまりバトルが出来なくて経験が積み重なったな……」

「そういえば、アルセタウンのジムリーダーって誰だ？」

ふと気になったので聞いてみる。

「そんな事も知らないのか？ まあ、興味があんまり無かったら仕方ないか」

「なんか、田舎者と思われているな」

確かに、地方都市に住んでいたからあんまり否定は出来ないな。

「アルセタウンのジムリーダーはプリマさん、メインタイプはノーマルタイプだ」

それを聞いて、メガガルーラが出て来るのは気のせいかな？

「ノーマルタイプか、基本的にタイプがシンプルだが強そうないメージがあるな」

ノーマルのジムリーダーはアカネやセンリなど強力なジムリーダーが多い。

「そうだな。使って来たポケモンはミミロルだったけど、私は全く歯が立たなかった

……」

オンバットもアイレの言葉を聞いて凹んでいる。

「ジムリーダーはトレーナーにレベルを合わせているとはいえ、かなりの腕利きだから勝つのは難しいと思うぞ」

俺はカップラーメンを食べ終わって、ゴミ袋に入れながら話す。

「やっぱり、そう簡単には勝てないのね」

「逆にポンポン勝てたら問題になると思うぞ」

アニメでは、何連敗したらジムが停止するとか言っていた筈。

「なら、今日はのんびりして明日に備えるしかないな」

そう言ってシートの上で横になっているので

「それだと風邪をひくぞ」

俺は、リュックから毛布を取り出す。

「ありがとう。私はグレイに世話になりっぱなしだな」

「まあ、そこは別にいいぞ。そんな事より、明日も町に向かう為に歩かないといけないから早めに寝るぞ」

俺も違う場所に引いてあるシートの上で横になって、毛布をかぶりながら周りを見てみるとスカイとオンバットも寝ているみたいだ。

「おやすみ」

色々あったが、これで良かったと思う。

〈次の日〉

「ベッドや布団を敷いてないと体が痛い」

俺は起き上がって喋ると

「そこは仕方ないだろ。布団とか持つて行くと洗濯とか大変だからな」

アイレはそう言つて、クラボの実を食べている。

なので、歯を磨いて俺もスカイ達にご飯を用意した後に、オボンの実を食べる。

「ふう、美味しかった」

「色々突つ込みたいが、無駄に体力は使いたくない」

そう言つてシートなどを片付けて、アルセタウンの方に歩き始めて30分後

「あれはストライクだな。アイレはバトルしないのか？」

「する。私の華麗な勝利を見といてよ」

そう言つてアイレはオンバットに指示をだす。

「オンバット、たいあたり」

「キュウ！」

そう言つてへたいあたりを仕掛けたが

「ストー！」

普通に回避されて、〈でんこうせっか〉を逆にくらう。

「オンバット、大丈夫？」

「クウー」

なんとか持ち堪えたみたいなので

「それなら、〈かぜおこし〉」

いや待て、〈かぜおこし〉を覚えているなら最初から使えよ！

オンバットは必死に翼を使って風を作って攻撃しているが

「嘘、なんであんまり聞いてないんだ！」

ストライクには効果抜群の筈だが、そんなに聞いた印象はない。

「ただ、少し弱っているからボールを投げるチャンスかもしれない」

その事を話すと

「そうか」

アイレはモンスターボールを取り出してストライクに向かって投げる。

そして、見事に当たってボールの中に入って

『クルッ、クルッ、クルッ、カチッ』

となつて見事ストライクをゲットした。

「やったあ！ 私の初めてゲットしたポケモンだ」

と言って喜んでいる。

まあ、俺もスカイしかないから新たにゲットするのもアリか。
そう思っていると

「どうかしら、私の華麗なゲットは！」

「確かに凄いが、それよりも町に向かって歩き始めるぞ」

「なんか、冷めているな」

仕方ないだろ、食料などの問題もあるからな。

俺達はそう言って町へ向かって歩く。

アルセタウン

あれから歩いて数時間後、やつとの事でアルセタウンに到着したので、スカイをゴージャスボールの中に戻す。

「ここが、アルセタウンか。思っていたよりも大きい」

俺が前いた地方都市程ではないが、人通りも結構あるのでビックリだな。

「そういえば、グレイは何処で泊まるんだ？」

「それは、どつかのホテルかポケモンセンターだろ」

当たり前な事を聞いて来たのでそう返す。

「なら、私の実家に来ないか？」

「いや、流石にそれはダメだろ。それに、今日はトレーナーランクの承認とアイテムや食料などを買わないといけないからな」

それに、何か嫌な予感がするな。

「そこは一旦置いておいて、実家に来てよ」

「あのさ、そこまで俺を連れて行きたいんだ？」

しつこいので聞いてみると

「聞きたい事があるのとグレイと一緒に旅をしたいから、家族に紹介したいんだ」
「色々突っ込みたいが、一緒に旅をしたいのは何故だ？」

正直、町に到着したら別れるものだと思っただけから驚く。

「えっ、私はてつきり一緒に旅をすと思っただけが違うのか？」

「昨日初めて会った奴にそう言われる方が不思議だ」

アニメでは何かのイベントがあつて主人公と旅をしているのは見た事あるので、そのパターンかと考える。

「グレイは疑り深いのだな」

「慎重なのは悪い事ではないからな」

「別に私は怪しい者でもないし、グレイの事は信じているぞ」

なんで、こんなに人の事を信じられるのが不思議だが

「仕方ないか、後でお前の実家に行かせて貰うな」

「それは良かった。それと、折れるのが早かったな」

これ以上、話し合いをしたら目立つから引いただけだ。

「まあ、まずはポケモンセンターとフレンドリーショップに行きたいけど、何処だ？」

「それは、私が案内する」

アイレはニッコリ笑って俺の手を掴んで来る。

「じゃあ、ポケモンセンターに向かおうぜ」

喋り方が男口調なせいで女に見えないのは気のせいかな？

そう思いながら、歩いて行く。

町の入り口から、赤い建物であるポケモンセンターに到着して、中に入ると

「なる程、この町のポケモンセンターも結構大きいな」

アニメみたいなので内心ではテンションが上がっているが、なんとか表に出さないようにする。

「グレイ、とりあえず受付に行つてポケモンを回復させようぜ」

アイレが、俺の手を繋いだまま受付に歩き始めたので

「あのさ、いい加減に手を離してくれないか？」

これだと、新人トレーナーが2人みたいに見えるよな。

そう思つてなんとも言えない気分になった。

「ちよつと待ちなさい！ 落ちこぼれのアイレ」

鋭い声が聞こえて振り向くと、金髪の目つきの悪い少女がこちらを睨んでいる。

「アイツは誰だ？」

アイレに聞いてみようとしたが、本人がガクガク震えているので、何かあるなと思う。

「プリマさんに挑戦する前のジムトレーナーにすら、全く歯が立たなかった貴女がまだ

トレーナーをしているなんてビックリよ」

なる程、いじめっ子か……。

それだと、かなり厄介な存在になるな。

そう考えていると、金髪の少女はさらにアイレの事をボロカス言ってくる。

「貴女のお姉さんは腕利きのトレーナーなのは知っているけど、スクールで最下位クラ

スの貴女にはその才能がないのよ」

アイレをみると半泣き状態になっていた。

「才能ね……。それなら、お前は才能はあるのか？」

「貴方、アタシを知らないのかしら？ スクールでトップクラスの成績で卒業したマー

ロよ」

「いや、俺は他の街から来たから知らないぞ」

「なる程、田舎者ね。それなら、まずは貴方にポケモンバトルして貰うわ。落ちこぼれの

アイレと一緒にいるならザコね」

なんか、言葉がイラつくが

「いいぞ。ただ、バトルのルールはどうする？」

「1対1のバトルでいいわ」

良かった、フルバトルなんて言われたら終わるからな。

「了解した」

「なら、ついて来て」

マールがそう言って来るのでついて行き、ポケモンセンターの横にあるバトルフィールドに到着する。

そして、トレーナーの立ち位置に俺とマールが立つ。

「それじゃあ、アタシのポケモンを出すわね」

マールはモンスターボールを手に取り投げると

「ピィー」

ピジョンが出て来た。

「このポケモンがアタシのエースのピジョンよ」

……。もっと強いポケモンが出て来ると思ったが、この程度か

「頼むぞ、スカイー！」

「ガウウー！」

俺は腰のゴージャスボールを手に取ってスカイをフィールドに出す。

「えっ……？ そのポケモンってガブリアスよね？」

周りの人や相手はかなり驚いているので

「そうだが、何か問題はあるのか？」

「貴方、初心者潰しなのかしら！　こんな勝てるわけ無いじゃない！」

「ハツキリ言うが、お前が喧嘩を売って来たから買ったただけだからな。あと、確認しないお前が悪い」

今回はメガ進化しなくてもいいかと思いつながら話す。

「うぐつ、見た目だけの可能性もあるわよね」

なんかブツブツ言っているので

「始めないのか？　それと、さっきはアイレの事をバカにしたから、その分の仕返しもしないといけないな」

俺はマール口を睨みつける。

「こうなったら、貴方をボコボコにするわ。ピジョンへたいあたり」

スタートも言っていないのに攻撃して来たが、スカイは

「ガウ？」

ピジョンをはたき落として地面に沈める。

「ピ、ピジョンっ？」

ピジョンを見ると戦闘不能になっていたの

「俺が何もしなくても勝利出来ただけど……」

なんとも言えない雰囲気になっていると

〔ガウウ♪〕

スカイが抱きついて来たので、頭を撫でる。

「戻ってピジョン」

向こうはポケモンもボールに戻して

「貴方、何者よ！」

「お前に教える気はない！」

アイレにどうやって謝らせてやろうと考えていると

「確かに、今回は彼女が悪いわ」

20歳くらいいのスーツを来た女性が出て来て、マー口を睨む。

「えっ……、プリマさん」

ほう、この女性がこの町のジムリーグか。

「貴女にはバッジを渡したのは間違いだつたかもしれないわ。まあ、それはいいわ。貴方にわたしはポケモンバトルを挑むわ」

なんか、話がややこしくなって来た!!

もちろん、受ける義務は無いので

「僕はこれからフレンドリーショップで買い物をしたり、ご飯を食べたいのでお断りします」

「もし、わたしに勝ったら賞金を渡すけど嫌かしら？」

何、賞金だと……。確かに、お金が無くなった終わりだからな。

そう考えて、スカイを見ると

〔ガウウウ！〕

完璧にやる気になっていた。

「決まりね。貴方はガブリアスでいいのかしら？」

「いいですよ」

俺とアルセタウンのジムリーダーの戦いが始まる。

ジムリーダー・プリマ

俺はジム戦はあまり興味が無いので、ポケモンセンターのバトルフィールドでこの町のジムリーダーであるプリマさんと対面している。

「貴方はトレーナーランクが決まってるって聞いてたわよ」

「それがどうしたのですか？ 正直、こんな事になっていなかったらバトルクラブに予約しに行っていましたよ」

俺はフィールドにスカイを立たせながら話す。

「それはごめんなさいね。でも、相当強いと思ったから戦いたくなかったのよ」

そう言っつて、ハイパーボールを手を持っている。

「嘘でしょ。プリマさんは本気で戦うのかしら？」

周りはかなり驚いているみたいだが

「今はプライベートよ。ジム戦みたいにはトレーナーのレベルに合わせなくてもいいのよ」

ハイパーボールを投げて、中からメガストーンをつけたポケモン、ミミロップが出て来た。

「相棒のミミロップを出して来るなんて……」

もう突っ込み疲れたので俺は左腕につけているメガリンクをみる。

「貴方もメガ進化出来るのよね。それなら、このバトル思いつきり楽しみましょう！」

ミミロップ、メガ進化！」

向こうはキーストンが付いているペンダントを触り、ミミロップをメガ進化させた。

「ミミイイ！」

メガミミロップか……。ガルーラじゃなくて良かったと思う反面なにかあるなと思う。

「なら、こちらも行きますよ！ スカイ、進化を超えるメガ進化！」

俺もメガリンクを触ってスカイをメガ進化させる。

「ガウウウ！」

やっぱ、メガガブリアスはカツコイイな。

そう思いながら、審判をジムトレーナーに任せて

「それでは、ジムリーダー、プリマとポケモントレーナー、グレイのポケモンバトルを始めます。使用ポケモンは1体、どちらかが戦闘不能になるか降参するまでバトルは続きます」

確か、ミミロップはへれいとうビームやへつぶきを覚えるから警戒しないとな。

「それでは、バトル開始！」

「スカイ、へじしん！」

俺は開幕と同時にへじしんを指示するが

「ミミロップ、へとびはねる」

ミミロップは高く飛び跳ねてへじしんを回避するが

「予想通りだ。スカイ、へドラゴンクロー」

「ガウウ」

スカイは飛んでミミロップに向かって青白い爪で攻撃しようとするが

「そのまま、へとびはねる」攻撃！」

向こうは真つ向から攻撃して来るので、へドラゴンクローとへとびはねるがぶつかっ

て、ミミロップが吹っ飛ぶ。

「攻撃力では圧倒的にこちらが上だな」

ミミロップが地面に落ちて来るが、なんとか耐え切ったみたいだ。

「まだいけるかしら、ミミロップ？」

「ミミイ！」

ヤバイ、何か大技が来そうだな。

「なら、これはどうかしら？ ミミロップ、へギガインパクト！」

「ミミイイイ！」

ミミロップが白いオーラを纏って、浮いているスカイ目掛けて突進する。

「こちらもへドラゴンクロー〜だ！」

「ガウウウ！」

スカイはもう一度、青白い爪を出現させてミミロップを向かいうつ。

「ミミイイイ！」

「ガウウウウ！」

ミミロップのへギガインパクト〜とスカイのへドラゴンクロー〜がぶつかり合って爆発が起こる。

「ミミロップ！」 「スカイ！」

俺とプリマさんは相棒の名前を叫ぶと

「ミミイイ…」 「ガウウ！」

ボロボロで戦闘不能になっているミミロップと、ダメージは負っているか立っているスカイが目に入る。

「ミミロップ戦闘不能。この勝負ポケモントレーナー、グレイの勝ち！」

ふう、なんとか勝てたな。

これでミミロップが氷技を持っていたら、相当キツかったかもな。

そう思っていると

〔ガウウウ♪〕

スカイが近づいて来たので頭を撫でる。

「ミミロップ、ありがとうね」

〔ミミイ……〕

プリマさんはミミロップの状態を見てホツとしているみたいなのだが

「嘘だろ！ プライベートのプリマさんが殆ど歯が立たなかつたぞ」

「あのトレーナー何者なのかしら？」

ヤバイ、かなり目立っている。

俺は離れたい気持ちになっていると

「グレイ君、バトルありがとうね。あと、賞金の金一封ね」

そう言って、お金がはいった封筒を渡された。

「こちらこそ、ありがとうございませす」

「まさか、こんな腕利きがアルセタウンに来るとは思つて無かつたよ。あと、指示も上手かつたから四天王を相手している気分になつたわ」

指示の方は、アニメを見てなんとかやつただけだけだな。

そう考えたながら

「グレイ、遅くなったけど昼ごはん食べに行かないか？」

いつのまにか復活していたアイレに言われる。

「アイレ、一緒にいた人が強かったと言って調子に乗っていないかしら？」

さつきは意気消沈していたマールが怒っているが

「悪いが、お前も人の事言えないと思うぞ」

俺は睨みつけると

「うぐつ、覚えてなさい！」

と言つてマールが逃げて行く。

「彼女は能力はあるけど、性格に難があるわね……」

ミミロップをボールに戻したプリマさんがそう答える。

「まあ、こちらもある事があるので失礼しますね。」

「ええ、分かったわ、こんなに強い貴方がジム戦に興味が無いのは不思議ね」

ジムは、仕掛けや他の事が面倒だから行きたく無いんだよ。

そう思いながら、スカイをボールに戻してポケモンセンターの中に戻る。

第6話

ポケモンセンターに戻って、スカイとアイレのポケモンを回復して貰っている間に「まさか、グレイのガブリアスがあそこまで強いとは思わなかったぞ」

「まあ、そこは言わなかったからな。それよりも買い物リストを出しとこ」

俺はフレンドリーショップに売っているアイテム表を貰って、買う物を選別する。

「まずは食料だな。俺の飯と、スカイのポケモンフーズはどれにしようかな」

正直、バトルの話はしたく無いのでなんとか話を逸らす。

「グレイが、話その話はしたく無いのがわかった」

「悪いな。あと、ボールも何個か買わないとな」

アイレと喋っていると

『グレイ様、ポケモンが元気になりました。至急、3番窓口まで来てください』
館内放送が流れて来た。

「それじゃあ、スカイを迎えに行つて来る」

「分かった。私もオンバットとストライクが元気になったら行くぞ」

俺は3番窓口に向かうとジョーイさんが

「はい、ポケモンは元気になりましたよ」

「ありがとうございます」

俺はお礼を言つて、ゴージャスボールを回収する。

そして、アイレもオンバットとストライクの回復が終わつたみたいで、他の窓口で受け取っていた。

「お前もポケモンの回復が終わつたのか」

「そういえば、1つ言いたい事があった。いつ私の事を名前で呼んでくれるんだ？」

「さあな？ それじゃあ行くぞアイレ」

俺は初めてアイレと名前で呼ぶ。

「ああ、わかった」

俺達はフレンドリーショップに向かう為に歩き始めた。

そして、ポケモンセンターの横にあるフレンドリーショップでアイテムを購入する。

「まずは、ハイパーボール十個とポケモンフーズと俺の食料だな。回復系アイテムは揃っているから他の物を買うか」

プリマさんから貰った賞金の五万円を使って色々購入する。

「グレイ、結構色々買うな。私はそんなにお金が無いから買えないぞ」

まあ、俺も転生時にお金が無かったら詰んでいたけどな。

そう考えながら、買い物カゴの中に入れた後、レジに向かう。

「合計は2万2800円になります」

結構高いが払えない額では無いので現金で払う。

「ありがとうございます！」

アイテムや食料をリュックの中に入れると

「それじゃあ、昼ごはん食べられなかったけど、私の実家に来てくれるか？」

アイレはそう言つて来るので

「いいけど、本当にお邪魔してもいいの？」

流石にアポ無しで行くのはマズイと思うが

「なら、今から連絡して聞いてみるな」

いや、それを最初にやれよ！

そう突つ込みたくなつたが、なんとか堪える。

そんなこんなで、アイレは実家に許可を取つたみたいなので

「許可も取れたし向かうぞ」

どう見ても実家に帰る雰囲気では無いよな。

そう感じてしまうが、仕方ないので行く事にする。へやはり、昨日いきなり会った人物に家に招かれる事にビックリする

そして、ポケモンセンターから歩く事20分。

そこそこ大きな一軒家の家に到着する。

「ここが私の実家だ」

「結構大きいな」

そう思っていると、アイレが鍵を取り出して扉を開ける。

「帰って来たぞ！」

なんか、入れない雰囲気だなと感じてしまう。

「お姉ちゃんお帰り、後ろにいるのは彼氏さん？」

アイレより少し小さい少女が出迎え来るが

「彼氏では無いぞ。私の旅の仲間の腕利きのトレーナーだ」

とアイレは真面目に答える。

「なんだ面白くない。お兄さんもこっちに来たら？」

「ああ、わかった」

なんか納得いかないが家の中に入る。

そして、リビングに連れてこられて

「あら、アイレの新しい友達かしら？」

「お母さん、私の旅の仲間のだよ」

「始めまして、グレイと言います」

とりあえず、挨拶をすると

「こちらこそ、始めまして。ワタシはカルサと言います」

「わたしはペルです。お兄さん、アイレお姉ちゃんはかなり男っぽいよ」

ペルがそう言つてニシシと笑つていると

「なんだと、私はこれでもフアツションとかに興味もあるぞ」

「それ、女の子だつたら普通だと思つてわよ……」

アイレはやはり残念少女だな。

「まあ、ここに来る前に色々あつたので男っぽいのは否定出来ませんね……」

「グレイまで、その事を言うのか」

「最初にお前と会つた時にキテルグマに追われている所に巻き込まれたんだぞ！」

その事を喋ると

「アイレ、一体グレイ君にどんな迷惑をかけたのかしら？」

カルサさんがニツコリした笑顔だが、かなり怒つてゐるみたいだ。

「実はその……」

アイレはガタガタ震えているので

「それじゃあ、他の部屋でお話しようかしら？」

「お姉ちゃん、ドンマイ」

「い、嫌だ〜」

半泣きになりながらアイレはカルサさんに連れて行かれる。

「グレイお兄さんは、アイレお姉ちゃんに振り回されて苦労したみたいだね」
幼女にそれを言われたら終わりなような気がする。

第7話

アイレがカルサさんとお話ししている間、俺はペルちゃんトリピングのソファアークに座って喋る。

「グレイお兄さんはどんなポケモンを持っているの？」

「それは、ここで言うより実際に見た方がわかると思うぞ」

俺はゴージャスボールを手に取りながら話す。

「なら、庭に行こう！」

ペルちゃんが俺の手を握って来るので

「カルサさんに言わなくてもいいのか？」

流石にいきなり離れたら駄目だろ。

そう感じるが

「ママには後で説明するから大丈夫？」

「まあ、わかった」

なので、俺とペルちゃんは庭に移動する。

そして、結構広い庭なので

「スカイ、出番だ！」

〔ガウウ♪〕

スカイをボールから出すと俺に抱きついて来た。

「カツコイイポケモンだね！」

ペルちゃんの目が輝いている。

「そう言つて貰えてよかった」

そう言つて、俺達はのんびりしていると

「グレイお兄さん、ワタシもポケモンに触つていい？」

「それは、俺よりスカイに聞いてくれるか？」

抱きついていたスカイの方を見ると頷いていたので

「触つていいみたいだぞ」

「わーい！　ありがとう」

ペルちゃんはスカイの腕に触つたり、肩車をして貰つて遊んでいる。

「楽しそうだからいいか」

俺は少し離れた所からその光景を見る。

そして、俺達はゆっくり遊んでいると夕方になって来たので

「ただいま。あの、誰もいないのですか？」

「この声はナタルお姉ちゃんだ！」

少しクールっぽい声が聞こえたので、ペルちゃんが迎えに行つた。

「ペル、声をかけられたら返事をしてください！」

「ワタシは庭にお客さんと一緒にいたから無理だよ」

「それなら、仕方ないですね。あと、お客様を庭に置き去りにしてもいいのですか？」

「そうだった！」

「なんか、慌ただしいな。」

少しして、ペルちゃんと紫髪の子セミロングの少女がこちらに来る。

「始めまして、自分の名前はナタルです。今はアルセタウンのジムトレーナーをして働いています」

「これは、ご親切に。僕の名前はグレイです。横にいるのが、相棒であるガブリアスのスカイです。今日はアイレさんに連れてこられてここに来ました」

間違つて無いので、そう喋ると

「あの、アイレがここにいないのは、お母さんに怒られているからですか？」

「ナタルお姉ちゃん大当たり！」

なる程、姉妹でもかなり性格は違うな。

「あの愚妹、また問題を起こしたのですね」

……、ナタルは意外と口が悪い。

「それよりも、ハルヤお兄さんのポケモンはカッコイイよ！」

「そういえば、このガブリアスはグレイさんのポケモンなんです。相当、鍛えられているのが分かります」

「まあ、そうですね」

正直、そう言い返すしか無かったので返す。

「あれ？ 今日、プリマさんのプライベートのガチポケモンがガブリアスに歯が立たないと聞いたのですが、もしかして……」

……はい、俺です。

その事を伝えようと

「やはりそうなのですね。ジムリーダーの本気のポケモンを倒せる人はあんまりいないのでそう思いましたよ！」

ヤバイ、ナタルさんも目が輝いている。

「グレイお兄さん。ナタルお姉ちゃんも戦闘狂だから、強いポケモンを見るのが好きなんだよ」

うん、だろうな。

「ガウウ……」

スカイも若干引いているように見えた。

俺は、なんとかこの状況を打破したいと思っっていると

「ナタル、ペル。グレイさんに迷惑をかけて無いかしら？」

カルサさんが玄関から出て来て、こちらに近づいて来る。

「お母さん、大丈夫ですよ。グレイさんにはご迷惑をかけて無いですよ」

「そうだよ。それに、ガブリアスはカツコイイよ！」

「あら、グレイさんのポケモンかしら？ かなり鍛えられていて強そうね」

〔ガウウ♪〕

スカイも嬉しそうに頷いているので良かった。

「それはともかく、グレイさんはどうしますか？」

「それは、アイレに連れて来られたので何も考えてなかったですね」

「ハア、やっぱりあの子は考えてなかったのね」

まあ、そうなるよな。

「ご迷惑なら、今からポケモンセンターかホテルで泊まるので大丈夫ですよ」

「ええー！」

ペルちゃんが驚いている。

「泊まる所が決まってなかったら、今日は泊まって貰っても大丈夫ですよ」

「それだと、カルサさん達に迷惑にならないですか？」

迷惑になるなら、速攻で立ち去るぞ。

そう思っているよ

「グレイさん、お母さんが大丈夫と言うなら大丈夫ですよ」

ナタルさんがそう言っ来て

「グレイお兄さん、今日は泊まって行って！」

なんで、こんなに懐かれたのかが分からない。

ただ、断れる雰囲気では無いので

「大丈夫でしたら、お邪魔します」

そう言っ、アイレ家に泊まる事になった。

バトルクラブ

そして、アイレの家に泊まって次の日。

「泊まらせていただいて、ありがとうございます」

とりあえず、頭を下げしておく。

「いいいえ、アイレが無理矢理連れて来たお客さんだから、こちらこそご迷惑をおかけしました」

向こうも頭を下げて来たので、この話は終わりにする。

少し話した後、家から出て歩き始める。

「さて、グレイ。早速だが、バトルクラブに行こう！」

昨日はカルサさんに散々怒られていたアイレだが、今は普通に復活しているのでタフだなどと思う。

「了解だ。でも、バトルクラブは何処にあるんだ」

「それは、ここから15分位歩いた所にある大きな建物だな」

「そこまで距離は無いんだな」

まあ、許容範囲だな。

そう考えて歩いていると、目の前に大きな体育館みたいな所に到着した。

「ここが、アルセタウンのバトルクラブだ」

「聞いていた通り、結構大きいな」

俺とアイレは中に入ると

「ようこそバトルクラブへ。私はこの所長、プロ・ファソルだ」

30台中盤の角刈りのおじさんが挨拶して来たので

「ご親切に、僕はグレイいいます」

と返す。

「ハハハ、そんなに身構えなくていいよ。朝はこうやって新人トレーナーが来ても大丈夫なように立っているだけだから」

「プロ・ファソルさんはジョーイさんやジュンサーさんみたいに、一族メインで経営しているんだぜ」

それ、アニメでもあったような気がする。

まあ、それはさておき

「すみません、トレーナーランクの事で来たのですが大丈夫ですか？」

今回、バトルクラブに来た理由を話す。

「まだ、ランクを決められていないトレーナーがいたのか？　ただ、君は何歳なんだね」

「今年で13歳です」

本当はもっと年上なのだが、コナ○みたいに体が小さくなったので、トレーナーズカードに書かれていた生年月日と、今日の日付を照らし合わせて答える。

「なる程、他の地方から来たトレーナーなのか。それなら私が説明しよう。まずは、モンスターボールクラスはトレーナーなら誰でもなれるクラスだ」

なる程、そこからランクアップして行く感じか。

「次に、スーパーボールクラスはそこそこ強いトレーナーのクラスだな。その次にハイパーボールクラスは基本リーグに出る事が出来る腕利きのトレーナーばかりだな。最後にマスターボールクラスはリーグトレーナーなど超凄腕のトレーナーばかりのかなりエリートクラスだ」

かなり長かったが、大体分かったが

「あの、ランクアップにはどうすればいいのですか?」

「それは、基本的には昇格試験を受けて合格したらなれるぞ。ただ、マスターボールクラスだけはここでは受けられない」

やはり、1番上は相当難しそうだな。

「まあ、まずは受付でトレーナーズカードを提出して、モンスターボールクラスになる事だな」

そう言つて、プロ・ファソルさんは俺達を受付の場所に連れて行く。

そして、受付の人にトレーナーズカートを提出して

「はい、グレイさんはモンスターボールクラスになりました」

と言われて、トレーナーズカートを返される。

「さて、これでモンスターボールクラスになったので、この施設の説明をするぞ」

「はい、よろしくお願いします」

俺達は受付から離れた所にある椅子に座つて説明を聞き始める。

「バトルクラブでは、トレーナー同士が戦つたりするバトル、ポケモンを鍛えたりする訓練場、昇格する為のバトル戦、大会などの主催などがあるぞ」

結構色々やっているんだな。

「グレイ、私は訓練場に行つて来てもいいか？」

「別にいいぞ」

「じゃあ、また後で」

アイレはあんまり理解出来ていないようだったな。

「彼女は自由人なんだな。それは置いておいて、説明を続ける」

長い説明を聞いた後、俺はバトルクラブにあるバトルフィールドの観客席に座る。

「今戦っているトレーナーはモンスターボールクラスだな」

モニターに映っているトレーナーの顔写真とポケモンを見ながら、そう思う。

「バトルは3対3のバトル。どちらとも最後の1匹か」

マンキーとコイルの戦いだな。

「コイル、〈でんじは〉」

「リリイ」

コイル〈でんじは〉がマンキーに当たって痺れているが

「負けないでマンキー、〈からてチョップ〉」

「プギイ」

マンキーの〈からてチョップ〉がコイルをかすめる。

「今の状態だったらコイルが有利だが、タイプ相性ではマンキーが有利だな」

俺がそうやって観戦していると

「隣座つても大丈夫かい？」

深緑色の髪色をした青年が声をかけて来る。

「大丈夫ですよ」

俺は振り向いてそう答えた。

「ありがとう。後、今やっているバトルの事で何か言っていたよね」

「はい、どっちが有利かを考えていました。」

「それで、君が勝つと思うのはどっちかい？」

今の状態なら

「おそらくコイルですね。相手はマヒ状態になっているのでへでんきショックやへマグネットボムなどで距離をとって戦えば、物理メインのマンキーは勝ち目が薄いですね」
「なる程」

そして、俺の予想通りコイルが勝利したので

「君の予想が当たりだね」

「はい、当たって良かったです」

正直、コイルのトレーナーが近接戦をしていたら負けていた可能性が高いので、距離を取って戦ってくれたので良かった。

そう思っていると

「少しいいか？」

野太い声が聞こえて振り向くと、ボディビルダーみたいな男性がいた。

「あの、僕に何か用ですか？」

「昨日ジムリーダーの本気のポケモンを倒していた坊主だな。オレは GANG、ハイパーボールクラスのトレーナーだ」

なんか、嫌な予感がするのだが

「悪いが、1対1の真剣バトルをしないか」

やっぱりか……。

でも、断れる雰囲気では無いので

「分かりました。こちらこそ、よろしくお願いします」
俺とガングさんのバトルが始まる。

ハイパーボールクラスのトレーナー、ガング

あの後、モンスターボールクラスの俺とハイパーボールクラスのガングさんの差があると言われて断られそうになったが、新人の指導という事でなんとか通った。

そして、空いているフィールドに移動して審判の人を呼んで来てバトルを始めるが

「あの、本当にいいのですか？」

「いいんだ。それよりもアイツはかなり強いぞ」

ギャラリーも集まって来たが、ガングさんが余裕で勝つと思っているみたいだ。

まあ、俺もギャラリーならそう思う。

「貴方もいいんですね。このままだと、ワンサイドゲームになりますよ」

「確かにそうなりますが、せっかくハイパーボールクラスのトレーナーと戦えるなら戦いたいです」

俺は、ゴージャスボールを手に持つ。

『アイツバカだろ』

『ボコボコにされて恥をかくだけよ』

『弱そうだな。でも、ガングさんのバトルを見るならいいな』

ヤバイ、この状況は悲し過ぎる。

「坊主、悪いが本気で行くぞ」

「よろしくお願いします」

俺は頭を下げる。

「わかりました。それでは、ハイパーボールクラストレーナーガングとモンスターボールクラスのグレイのバトルを開始します。使用ポケモンは1体、どちらかが戦闘不能になるか降参するかで勝負が決まります」

まあ、ここは普通のルールだな。

「それでは、始め！」

「頼むぞ、スカイ！」 「ボスゴドラ、お前の出番だ！」

「ガウウウ！」 「ゴオオ！」

「間に合った！」

プリマさんの声が聞こえたような気がするが、バトルに集中しないとな。

「昨日見た通り、かなり強そうだな」

「そう簡単には負けるつもりは無いです」

スカイとボスゴドラが睨み合っている。

『アイツ、モンスターボールクラスなのに、なんであんな強そうなポケモンを持っている

んだ？」

『クラス詐欺じゃ無いかしら？』

観客は好き勝手言ってくるな。

「すまない、アイツらがあんな性格が悪いとは思ってもなかった」

「別に大丈夫ですよ。あと、ガングさんは悪く無いですよ」

そして、そうやって話していると

「お前ら！ グレイ君は今日登録したばかりのトレーナーだ。もしかしたら他の地方の凄腕トレーナーの可能性が高いんだぞ」

プロ・ファソルさんが観客席のトレーナーに対してキレた。

「それでは、ポケモンバトル開始！」

「進化を超えるメガ進化！」 「メガ進化！」

「ガウウウウ！」 「ゴオオオ！」

俺とガングさんはポケモンをメガ進化をさせる。

「スカイ、へドラゴンクロー！」

「ボスゴドラ、へアイアンヘッド！」

「ガウウウ！」 「ゴオオ！」

スカイは青白い爪を生やして、ボスゴドラは頭から銀色のエネルギーを放出して、ど

ちらとも相手に突進して行く。

『ガキイイ!』

技がぶつかる音がして見てみると、スカイが教えていたがボスゴドラには効果今ひとつなので、そこまで聞いていないみたいだ。

「スカイ、少し離れてへじしん!」

「ボスゴドラ、へストーンエッジ!」

「ガウウウ」 「ゴオ」

スカイのへじしんがボスゴドラに、ボスゴドラのへストーンエッジがスカイに当たると。

「ガウウ」 「ゴオオツ」

スカイの方は、効果今ひとつのへストーンエッジが当たってもダメージはあまり無いが、ボスゴドラは、特性のへシエルターで軽減しているがへじしんは効果抜群なので、結構ダメージが入った。

「なら、この技はどうだ。ボスゴドラ、へ冷凍パンチ!」

「ゴオオオ!」

「ヤバイ、スカイ空に逃げろ」

「ガウウウ!」

スカイは空に逃げてなんとか躲すが、〈冷凍パンチ〉を持っているのは厄介だな。
「反応もいい、これは楽しめるぞ。ボスゴドラ、〈はかいこうせん〉」

なんだと!?

〔ゴオオド!〕

「スカイ、回避してくれ!」

〔ガウウ!〕

ボスゴドラが放った「はかいこうせん」はスカイの横を通り抜けるが
「ボスゴドラ、逃すな!」

横に振り払ってスカイに命中して、煙が上がる。

「スカイ!」

〔ガウウ……〕

なんとかガードして耐え切ってくれた。

「スカイ、よく耐え切った!」

〔ガウウウ!〕

結構ボロボロになっているが、まだ動けるみたいなので

「スカイ、全力の〈じしん〉!」

ボスゴドラは〈はかいこうせん〉の反動で動けなくなっているので、〈じしん〉を使う。

「ガアア！」

スカイの〈へじしん〉はボスゴドラに直接したが

「嘘だろ……。耐え切ったのか」

そこには、かなりボロボロになっているが立っているボスゴドラを見る。

「よし、ナイスだボスゴドラ！ この距離で〈冷凍パンチ〉」

「マズイ、スカイ〈ドラゴンクロー〉！」

「ガウウウ！」 「ゴオオド！」

スカイの青白い爪とボスゴドラの冷気を纏った拳のクロスカウンターになって爆発する。

そして、煙が晴れてフィールドをみると

「ガウウウ……」 「ゴオオ……」

スカイとボスゴドラがどちらとも倒れていた。

「ガブリアス、ボスゴドラ、戦闘不能。この勝負引き分け！」

なんとか引き分けに持ち込めたが、ハイパーボールクラスはかなり強いな。

俺とガングさんは互いにポケモンをボールに戻した後

「まさか、オレのボスゴドラと引き分けるとは思ってもいなかったぞ」

「「こちらにも、引き分けに持ち込めたので良かったです」

そう言つて話していると

『クラス詐欺が何言つているんだ!』

『そうよ! ポケモンが強いだけで調子に乗らないで!』

ヤバイ、めつちやブーイングだな。

「貴様ら、文句があるならオレの戦つて引き分け以上に持ち込め!」

ガングさんがキレて観客席のトレーナーを睨んでいる。

「アルセタウンのトレーナーがここまで問題があるとはね。これは、再教育が必要かしら?」

プリマさんが観客席から降りて俺達の方を見て頭を下げて来る。

「ガング師匠、グレイ君。こんな状況になって申し訳ありません」

「別にいいですよ。プリマさんはなにも悪く無いですよ。あと、ガング師匠?」

「プリマはオレの弟子だ」

なる程、そういう事だったのか。

「ガング師匠はポケモンリーグのリーグトレーナーで超凄腕なのですよ。それと、弟子もかなり優秀でエリートトレーナーなジムトレーナーの指導をしているのです」

この話は長くなりそうだな。

そう感じながら話を聞く。

ポケモンセンター再び

あれから GANG さん達と色々話して別れた後、特訓していたアイレと合流してポケモンセンターに向かう。

「はい、グレイ様のポケモンは元気になりましたよ」

「ありがとうございます」

ジョーイさんにスカイを預けて回復して貰った。

「グレイ、私のポケモンも回復したから昼ごはんを食べに行こう」

「そうだな」

俺とアイレは食堂に行つて、スカイ達を出してみんなでご飯を食べていると

「少しいいかい？」

バトルクラブで少し話していた深緑色の髪をした青年が声をかけて来る。

「えっと、僕達に何か用があるのですか？」

怪しそうなので警戒していると

「そんな警戒しなくてもいいよ。さつき君と話していて思った事があつて聞きたいんだ」

そうやって喋って来るが

「グレイに何か興味があるのか?」

「そうだね。僕はこれでもエリートトレーナーでだけど GANG さんには歯が立たなかつたから、君のバトルに興味が湧いたよ」

「あの、この町には他にも強い人はいると思いますよ。あと、僕は普通のトレーナーですよ」

GANG さんと引き分けたのはたまたまだからな。

そう思っているよ

「グレイは GANG さんと引き分けたのか!?!」

「そうだが」

アイレはかなり驚いているみたいで、早口で話して来る。

「GANG さんはこの町のトップクラスのトレーナーで、ジムリーダーのプリマさんの師匠だぞ」

「それは聞いた」

俺はお茶を飲みながら話す。

「グレイはなんでそんなに落ち着いているだ?」

「それは、名前も知らないお兄さんやお前から言われても実感がないからな」

コップを置いてから、アイレとお兄さんを見る。

「確かに、自己紹介していなかったね。僕の名前はススト、15歳のエリートトレーナーだ」

さつきも聞いたが、エリートトレーナーなのか。

そう考えていると、スストさんは俺の隣の席に座って

「それじゃあ、次は君達の事を聞いていいかい？」

と言われたので、こちらも答える。

「グレイ君の名前はモニターに写っていて知っていたけど、そっちの女の子は新人トレーナーのアイレちゃんか」

「そうだ。あと、私の事をちゃん付けしないでくれ」

アイレが不服そうだが

「これは悪かったね。それよりも、グレイ君達はこれからどうするの？」

「僕は大会とか出て、賞金を稼ぎたいと思っています」

「私はジム戦を突破してしてリーグに出たい」

「なら、1つ提案んだけど僕も君達の旅について行っていいかな？」

……はっ？

「いやいや、今日いきなり会った人と旅する事は出来ませんよ」

「グレイ君。確かにそうかもしれないが、僕は色々情報を知っているから旅には役に立つと思うよ」

「なんか、ありそうなんだよな。」

「グレイ、私はスストに賛成だ。旅は2人より3人の方が面白いからな」

「このバカはそう言うと思った。」

「ただ、2対1になったのでこちらが不利だ。」

「これからよろしく。あと、僕には敬語はいらぬよ」

「それならこちららも君付けはいらぬ。それと、なんで俺達を選んだんだ？ 他の新人

トレーナーは結構いるだろ」

「グレイ、君も見ただろ。新人トレーナーのマナーの悪さを」

「確かに、こっちは正々堂々と戦っているのにブーイングを飛ばして来たからな。」

「だから、あんな新人トレーナーと一緒に旅はしたくないと思ったんだ。後、個人的にグレイに興味がある事だね」

「それを言われたら終わりのような気がするが、納得は出来た。」

「そして、ポケモンセンターを出て手持ちの、ガブリアスへスカイ、アイレはオンパツトとストライク、スストはロズレイドをボールから出す。」

「やはり、グレイのガブリアスは見た目通り強いんだね。アイレも新人トレーナーとし

てはそこそこいいと思うよ」

「本当か！　なら、今からジム戦に行つて来る」

アイレはオンバットとストライクをボールに戻して、ポケモンジムに走つて行つた。

「彼女は豪快だね……」

「そうだな……」

俺とスストは少し固まっていた後、アルセジムに向かう。

アルセジム

俺とスストはアイレを追ってアルセジムに向かうと

「アイレさん、すみません。ジムリーダーは外出中ですので、ジムトレーナー戦しか出来ないのですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。ジムトレーナー戦お願いします」

アイレとジムトレーナーが話している光景を目にする。

「普通に話しているな。アイレなら無理矢理突破すると思っていたのだが……」

そう発言すると

「グレイ、やっと来たのか」

「アイレ、お前が走って行くのが早いだけだ」

俺はジト目で睨む。

「それは悪かったな。それよりもジムトレーナー戦をやるから見ていてくれ」

「ああ、観客席で見てるよ」

俺とスストは観客席に移動して、フィールドを見る。

「ジムトレーナー戦で3回連続で勝たないとジムリーダーと戦えないから大変だよ」

「なる程、一回でも途中で負けたら最初からか」

それはかなり厳しいルールだな。

「まあ、トレーナーのレベルに合わせて使って来るポケモンは違うから対処は出来ると思うよ」

アルセジムはノーマルタイプメインのジムだからかくとうタイプが有利か。

「それにアイレちゃんがフィールドに入って来たから、そろそろだね」

ガチガチなのが大丈夫か？

そして、審判と今回アイレの相手をするジムトレーナーが前に出て来る。

「あれ、ナタルさんが出て来て無いか？」

俺は前にあつた少女を見つける。

「グレイ、あの子は知り合いなの？」

「知り合いというより、アイレの姉だ」

「ええ!? あんまり似てないよ」

まあ、そうだな。

そう思いつつ、向こうを見てみるとバトルが始まるみたいだ。

「1人目のポケモンはコラッタか。ノーマルなら普通だな」

アイレはストライク、相手のジムトレーナーはコラッタだからな相性的には有利不利

はないな。

「さて、見ものだね」

スストもそう言って集中しているみたいだ。

そして、審判が開始の挨拶を言って、バトルがスタートした。

〈アイレ視点〉

私は前にボコボコにされたジムであるアルセジムのジムトレーナーとバトルを始める。

「コラツタ、へひっさつまえば〜！」

「ストライク、へでんこうせっか〜でかわせ！」

コラツタの前歯がストライクに当たりそうだったが、なんとか躲す。

「ストライク、反撃のへつばさでうつ〜」

「ストツ〜！」

ストライクはそこそこ強いけど、ジムトレーナーのポケモンも強い。

「前よりは腕が上がっているね。ただ、これはどうかかな？」

向こうのジムトレーナーは余裕があるみたいだ。

「へでんこうせっか〜！」

私とジムトレーナーは同じタイミングで同じ指示をして

〔ストツ！〕

〔コツ！〕

ストライクとコラツタがぶつかり合う。

〔ストー！〕

ストライクがコラツタを押し切った。

「よし、トドメの（れんぞくぎり）」

カマが緑色に光ったコラツタを切り裂く。

〔コツ……〕

コラツタは目を回して倒れた。

「コラツタ戦闘不能、ストライクの勝ち！」

私勝ったんだ！ あれだけ落ちこぼれと言われたのに……

思わず泣きそうになっていると

「1回目は勝てたのはいいけど、後2回あるから終わりではないよ」

ジムトレーナーの人にそう言われて気を引き締める。

そして、2人目もストライクでギリギリ勝ったけど最後の1人はナタルお姉ちゃんだ。

「悪いけど、自分は妹には負ける気は無いですよ」

そう言つて、ヨーテリーを出して来たので私は交代してオンバットを繰り出す。

「それでは、ジムトレーナー戦はじめ！」

審判の声が聞こえて始まる。

「ヨーテリーへたいあたり！」

「カウウ！」

ヨーテリーが浮いているオンバットに狙いを定めたが

「オンバット、へかせおこし！」

「クウ！」

ヨーテリーは接近して来たが、オンバットは距離をとつて攻撃する。

「なる程、グレイさんに何か言われたのですか？」

「グレイには世話になつてゐるから、ダサイ所は見せられないんだよ」

私よりも圧倒的に強いグレイを見て、色々見つかる事があつた。

それを思い出して戦う。

「ヨーテリーに遠距離技がない事を知つていて攻撃しているのですか？」

「そんな事は知らない」

その言葉を聞いたグレイとスストは呆れているみたいだけど、バトルを進める。

「クウ」

するとオンバットが疲れて来たみたいだ。

「チャンス、ヨーテリーへかみつく！」

「カウウ！」

「マズイ、オンバット躲せ！」

「クウ!?」

なんとか飛ぼうとしたみたいだけど、ヨーテリーに噛みつかれた。

「オンバット、なんとか振り払え！」

「クウウ！」

その言葉にヨーテリーを地面に叩きつけてフラフラしながら飛んでいるオンバットと、目を回しているヨーテリーが目に入る。

「ヨーテリー戦闘不能、この勝負はアイレの勝利！」

やった!? お姉ちゃんに勝てた。

「ハア、ヤツパリ自分のポケモンを使いたい」

いやいや、それをされると私は勝てないぞ。

そう思いながらお姉ちゃん達と話す事にする。

アルセジムその2

〈グレイ視点〉

「アイレはジムトレーナー戦はクリア出来たみたいだな」

「でも、ここからだよ。当たり前だけどジムトレーナーよりリーダーの方が強いよ」
まあ、そうだろうな。

「それは置いておいて、アイレが手招きしているのは気のせいかな？」

「してるね。グレイ、行って来たら？」

俺は観客席からフィールドに向かう。

「グレイ、私のバトルどうだった？」

「普通によかったと思うぞ」

俺もある意味新人トレーナーなので人の事は言えない。

「それは良かった。ただ、プリマさんは出かけているからここまでしか出来ない」

それはそうだな。

「まあ、次はグレイの番だな」

……はっ？

「いやいや、俺はジム戦はしないぞ」

「なんでだ？ 強いトレーナーになるならやっておいた方が良くないぞ」

まず、面倒な事は避けたい。

「えつと……。 그레이さんはジム戦しないのですか？」

「はい、やらないです」

リーグ戦みたいにテレビに映るのが嫌だからな。

「自分は 그레이さんと戦ってみたかったです」

ナタルさんは何故か残念そうにしている。

「それなら、ジム戦とは関係なしに本気で戦うのはどうですか？」

俺がそう提案すると

「わかりました。私個人で戦わせて貰いますね」

なんか、目がガチになっている。

そして、1対1のバトルが始まる。

「それでは、 그레이対ナタルのポケモンバトルを始めます。使用ポケモンは一体、どちらかが戦闘不能になるまで勝負は続きます」

審判さんがそう言った後

「ではいきます！ ムーランド 出番です！」

〔ガルウー！〕

なる程、やはりノーマルタイプを使って来るのか。

〔それじゃあ行きますか！ スカイ、頼むぞ！〕

〔グウウー！〕

フィールドにはカブリアスとムーランドが睨み合っている。

〔やはりかなりの迫力ですね。でも、負ける気は無いですよ〕

〔ガルウー〕

向こうも気合が入っているみたいだ。

〔それでは、バトル開始！〕

〔ムーランド、へギガインパクト！〕

〔ガルウウー！〕

向こうはかなりのエネルギーを纏って突進して来たので

〔スカイ、「ドラゴンクロー」！〕

〔ガルウー！〕

こちらも真つ向からぶつかるとなる事にした。

〔ガルウウー〕

〔ガルウウー〕

そして、〈ギガインパクト〉と〈ドラゴンクロウ〉がぶつかったので爆発が起きた後、どちらともが後退したので

「スカイ、相手は反動で動かないから〈じしん〉！」

「グルウウ！」

スカイは地面を揺らしてムーランドにダメージを与える。

「ムーランド、大丈夫ですか？」

「ガウウ」

結構ダメージは入ったみたいだが、こつちも威嚇で攻撃力が下がっているのが痛いな。

「なら、これならどうですか？ ムーランド、〈じやれつく〉！」

「ガウウウ！」

ヤバイ、フェアリー技か！

「スカイ、〈アイアンベッド〉！」

「グルウウ！」

まあ、対策はありますよ。

ムーランドの〈じやれつく〉とスカイの〈アイアンベッド〉がぶつかるが、相性的にこつちが有利なので弾き飛ばす。

「ムーランド！」

〔ガウウ……〕

向こうはかなりのダメージが入ったみたいだな。

「これでトドメだ！ スカイ、「りゅうせいぐん」！」

〔グルウウ！〕

スカイが天から隕石を降らせてムーランドを攻撃する。

〔ガウウ!?!〕

ムーランドは躲せずに直撃したので

〔ガウウ……〕

ムーランドはダメージが蓄積したみたいで目をまわして倒れた。

「ムーランド戦闘不能、この勝負グレイの勝ち！」

「ふう、じゃれつくが来た時はかなり焦ったな」

〈グルウ♪〉

スカイが抱きついて来たので頭を撫でていると

「やはり強いですね。自分の完敗です」

ムーランドをボールに戻したナタルさんがそう言って来るので

「いえいえ、こちらこそ苦戦しましたよ」

やはり相性の問題もあるよな。

「正直、ハイパーボールクラスの能力があると思いますが、なんでジムバッチを集めないのですか？」

「俺はテレビに映ったりするのが嫌なんですよ。なので、賞金稼ぎとして戦っていきたくないですね」

まあ、そんな感じで今日はポケモンセンターに向かい、次の日にアイレがプリマさんに勝利してジムバッジを手に入れた。

1 番道路

アイレがプリマさんに勝利した次の日

「やった、最初のジムバッジとケースが貰えた♪」

バッジケースは1個目のジムをクリアした時に貰えるらしい。

「アイレはかなり喜んでるね。まあ、僕も最初のバッジを手に入れた時は喜んだから気持ちはわかるよ」

スストも昔を思い出しているみたいだ。

「グレイもジムバッジを手に入れたらこの気持ちはわかるのになんで戦わないの?」
「俺は別にジム戦はやりたくないだけだ」

俺は主人公ではないから、ストーリーを邪魔したくはない。

「なる程ね。それなら次の街であるセレスタウンに向かうかい?」

「そうだな。私は前よりも強くなったから次のバッジもゲットだ!」

アイレはそう言ってポケモンセンターが出て行ったが

「ジム戦はそんな甘い物ではないよ」

スストがポツリとそう言ったので

「まあ、それはどうなるか分からないな」

俺達は少し話してアイレを追いかける。

アルセの森に入るまでにある道路である1番道路を歩いていると

「ねえ貴方、ポケモンバトルしない?」

ミニスカートの少女が声をかけて来たので

「では、今回は僕が相手するよ」

スストが前に出てバトルをするようだ。

「ルールは1対1でいいかしら?」

「それでいいよ」

ルールが決まったみたいで、2人はボールからポケモンを繰り出す。

「頼むわよ、バタフリー!」

「ファイ!」

「ロズレイド、出番だ!」

「ロズツ!」

虫と飛行のバタフリーと草と毒のロズレイドなら前者の方が有利か。

「それでは、行くわよ。バタフリー、「かぜおこし」!」

「ファイ」

バタフリーが翼を動かして風を作るが

「ロズレイド、躲して〔ヘドロばくだん〕！」

〔ロズツ〕

ロズレイドは上手く躲して毒対タイプの方である〔ヘドロばくだん〕を当てる。

「グレイ、これはどっちが有利なの？」

「タイプ的にはバタフリーの方が有利だが、経験的にはロズレイドの方が上みたいだな」

エリートトレーナーは伊達ではないか。

「まだまだ負けないわ、バタフリー〔サイケこうせん〕」

〔フイイ！〕

バタフリーの目から紫色の光が出て来たが

「ロズレイド、「シャドーボール」！」

〔ロズツ！〕

ロズレイドは黒紫色のボールを作ってバタフリーの〔サイケこうせん〕にぶつける。

相性的に有利なので、サイケこうせんを打ち払ってバタフリーに当たる。

〔フイイ……〕

耐久的には低いバタフリーはノックアウトしたみたいだ。

「バタフリー戻って」

ミニスカートの少女はバタフリーをボールに戻す。

「バトルありがとうございました」

かなり悔しそうにしているが、礼儀はちゃんとしているみたいなので

「こちらこそ、ありがとう。この辺のトレーナーとはあまり戦っていなかったから、ちよ
うどよかつたよ」

そう言つてラストと握手した後、ミニスカートの少女と別れる。

「しかし、いきなりバトルを挑まれるのは大変だな」

俺はそう喋ると

「ねえ、前から悲鳴が聞こえるのは気のせいかな？」

「そういえば何か聞こえるな」

キヤーとかブウンが聞こえて来たので

「何か嫌な予感がする。スカイ、護衛を頼む！」

「グウウ！」

俺はゴージャスボールからスカイを出す。

「私も、オンバット、ストライプ！」

「クウウ」

「ストツ！」

「僕はロズレイドはすでにボールから出しているから大丈夫だね」

〔ロズツ〕

俺達はポケモンを出してアルセの森に入ると

「ギャャ!? 助けてー」

スピアーに追いかけてられている少女を見つけたので

「よし、逃げるか!」

俺は180度回って逃げようとするが

「グレイ、すでに手遅れだと思うよ」

「えっ……」

スストの言葉通り、少女が連れて来たスピアーがこちらに来る。

「ちよ!? またこのパターンか」

「それよりも、戦わないとヤバいぞ」

「お前が言うな!」

前にキテルクマに追いかけていた奴が言うセリフではないと思うぞ。

「助けてくださいー」

少女は傷だらけで逃げているので

「まあ、俺達も完璧に巻き込まれたな」

とりあえず、スカイをメガ進化させる。

「グウウウ！」

「それじゃあ、一斉攻撃だ！ スカイ、「りゆうせいぐん」！」

「オンバット、「かぜおこし」。ストライク、「きあいだめ」

「ロズレイド、「シャドーボール」！」

俺達の一斉攻撃で

「スピーイ!？」

相手のスピーアーを撃退する。

「ハアハア、なんとか助かった」

少女はボロボロなので

「アイレ、あの少女の手当てをしてくれないか？ 俺とスストは離れているからさ」

「わかった」

それから1時間後、怪我の手当てが終わった少女に声をかける。

「さて、いきなりスピーアーに追いかけられていたが大丈夫か？」

「グレイ、私の時と対応が違うのは気のせいかな？」

「それは知らん！」

俺とスストは少女に質問していると

「あの、ガブリアスを使っているのは貴方か？」

えっ、話を通じてたくないか？

そう思いながら、話を聞き始める